



ベニヤ工場の浸水(港区新船町)
昭和34年10月9日

ほ ぼうぜん せつび なが しゃいん 呆然と設備眺める社員たち

名古屋市南区の貯木場周辺には木材を加工するためのベニヤ工場が多数あり、沢山の人々が勤めていました。写真では、加工する機械類や木材が水に浸かっている様子を目の前にして、従業員らが呆然と立ち尽くしています。多くの工場が高潮により打撃を受けたことでしょう。ちなみに、貯木場は子供たちの絶好の遊び場だったそうです。



引揚げてきた町民(港区南陽町)
昭和34年11月19日

ま やなん す ぼしよさが まずわが家何とか住める場所探す

リアカーで生活するための荷物を運びながら、住む場所を探していたのでしょうか。災害の後に生きていくための苦労が偲べれます。



破壊された校舎の修復作業
(南区南光中学校)
昭和34年11月4日

み みず ひ ふっこう かつき 水が引きさあ復興と活気づく

写真は11月4日の南区南光中学校の様子です。完全に水が引き、2階には生徒たちがいるようですが、窓は一部を残すのみで、ほとんど壊れたままです。外では、外壁など校舎の修理が進められています。



惨害を蒙った南陽支所
日付不明

む むり あとしまつ 無理するなボチボチやろう後始末

1階が水に浸かり物資を運んだり作業をするためには、2階の屋根伝いで窓から出入りするしかなかったのでしょうか。写真をよく見ると雨が降っているようで、思わず「無理しないで」と読み札のように言いたくなってきます。



災害死亡者名の入った千羽鶴
(中区市役所内)昭和34年11月26日

め めいふく いの こ せんばづる 冥福の祈りを込めた千羽鶴

写真は、中村市役所内の一室です。机の上には、伊勢湾台風で亡くなった方の名前が書かれた千羽鶴が置かれています。亡くなった方の冥福を祈りながら、一羽ずつ折られたのでしょうか。



水のひいた被災地に仮設で開店した食品店(南区柴田本通)
昭和 34 年 10 月 19 日

も もぎてん み かっきみ 模擬店もちらほら見られ活気満ち

被災地では水が引いた後、仮店舗（模擬店）が開くようになりました。
店を立て直すための建築資材がなかなか手に入らなかったことに加え、
さらに建築業者も順番待ちの状態だったため再建にはかなりの時間を要したそうです。



屋根上に急造した仮設小屋
(南区道徳本町)昭和 34 年 10 月 4 日

や やね うえ つく かせつごや 屋根の上うまく造った仮設小屋

避難所が開設された後も、水に浸かり傾いた壊れかけの家にあえて住み続ける人々が多くいました。
住み慣れた我が家への愛着もあったでしょうし、混み合う避難所を避けての選択だったのかもしれませんが。
そういった人々はかび臭い屋根裏を避け、屋根の上に即席の小屋を造るなどして風雨を凌いでいたようです。



疎開先の地元民に送られながら
帰宅の途につく港区港楽町の人々
(中村区中村小学校)
昭和 34 年 10 月 29 日

ゆ ゆるみなきテープで繋ぐ人の縁

避難所は原則として居住地と同じ区内の避難所が被災者に割り振られましたが、特に被害の大きかった南部地域の人々は地域ごと、または学区ごとに集団で名古屋市北部へと避難しました。写真は中村区中村小学校へ避難していた港区港楽町の人々が地元へ帰宅する日の様子です。

体験談

学校へ教科書がつかえなくなり港区の方から転校して来た子と友だちとなり、教科書をゆずりあってみて勉強した思い出があります。(千種区、11 歳、女性)



健気だった学生諸氏の活躍
(港区 11 号地)
昭和 34 年 10 月 15 日

よ よくやった学生さんに感謝する

ボランティアという言葉もない時代、被災直後から多数の学生が復興に携わりました。物資・資金の街頭募金活動や物資の運搬・配布作業、炊き出し、堤防締切のための土のう作りなど活動は多岐にわたりました。遺体処理に携わった学生も少なからずいたそうです。

体験談

私は当時 8 才で、静岡県に住んでいました。それでもこの台風は、60 坪の家をぎしぎしとゆらし、家が壊れるか子ども心に思いました。名古屋でこんな大災害が起こっていたとは知りませんでした。縁あり名古屋で結婚し住んでおりますが、夫はその当時高一で、伊勢湾台風で亡くなられた方のひつぎ作りのお手伝いをしたそうです。(男性、16 歳、守山区)(女性、8 歳、静岡県)



大手橋付近の惨状(港区大手町)
昭和 34 年 9 月 28 日

ら らんざつ りゅうぼくろい みち た 乱雑に流木類が道を断つ

名古屋市は古くから製材・木製品工業がさかんで、伊勢湾台風当時も多数の貯木場が堀川等の水面やその両岸に設置されていました。高潮によって市街地に流出した貯木は人名や建築物を破壊しただけではなく、水が引いた後も留まってその後の復興を妨げる大きな原因になりました。

体験談

1959 年 9 月 26 日、19 時頃。入社 2 年目で、名港の会社にいました。高潮が何か水が入ってきたので、皆すぐ帰宅しました。翌 27 日、笠寺駅から熱田駅まで線路の上を歩きました。左右の家は水につかっていた。熱田駅から築地口までは水(30 cm 位)の中を歩きました。名古屋港の方面はラワン材がごろごろしていました。(港区畑中、19 歳、男性)



工場内へ飛び込んだ
流木群の整理
(港区船見町)日付不明

り りゅうぼく きょうき おおあば 流木が凶器となって大暴れ

伊勢湾台風による河川の決壊で特に致命的だったのは、当時各地に係留してあった貯木場のラワンなどの材木でした。これらが高潮の影響を受け流木として住宅地に押し寄せ、大きな被害を引き起こしたのです。

体験談

山崎川の堤防が壊れたと言われ、父母妹（6ヶ月）で逃げました。濁流と共に大きな木材が木場方面の貯木場から流れてきたのをかすかな記録に覚えています。幸い近くの会社の倉庫に逃がれ助かりました。母の話で、台風が去った空が星いっぱいだったと覚えています。（南区泉楽通、3歳、男性）



当時唯一の交通機関だった渡船
(港区南陽町)日付不明

る る すたく もど みち みず うえ 留守宅に戻る道なく水の上

写真は台風直後ではほぼ唯一の交通手段だった渡し船と、その乗客の様子です。船に乗り、まるで海のようになった町で道なき道を進む姿は呆然として見えます。



ふとんの配布を待つ被災者
(南区宝小学校)
昭和34年11月29日

れ れつ きゅうえんぶつ し しきゅう 列をなし救援物資が支給され

写真は、11月29日の布団の配給の様子です。長い列の奥には、布団が屋根に届くほどに高く積み上げられています。台風による浸水で布団類はほぼ使えない状態になってしまったため、冬場を前に配給が実施されました。

体験談

小学校1年生でした。覚えているのは何日か経った頃、名古屋市から防災用ごはんの缶詰め 五目御飯の様で味がついていました。珍しいのがうれしくてとてもおいしかったと記憶しています。弟と多い少ないとケンカしながら頂きました。（中川区篠原町、7歳、女性）



給水に活躍の市消防車
(中川区富田町榎津)
昭和34年10月16日

ろ ろうほう しょうぼうしゃ きゅうすい 朗報だ消防車から給水だ

水没地域や井戸水を使用している地域などでは、水が使えない状況でした。そういった地域では「食物よりまず水を」という声が強く、配水管の応急修理工事と並行してタンク車などによる給水活動が10月末まで続けられました。



中区南大津通の被害状況
(中区南大津通り)
昭和34年9月27日

わ わす みず きょうふ 忘れまい水の恐怖とすさまじさ

多くの人に深い傷跡を残したこの伊勢湾台風以後、堤防や防波堤の改修など様々な措置が取られてきました。しかし、あくまで「海抜ゼロメートル地域は水害に弱い土地だ」という認識を忘れてはいけません。地域の記憶と経験を語り継ぎ、災害への心構えを高めましょう。

体験談

港区で災害にあいました。多くの方々、海外からの救護物資に大切感謝しています。毎日、おにぎり、いかのかんづめ、かんぱん等60年前の食事。40日間水が引かず、今改めて親の苦勞が身に沁みます。（港区、10歳、女）